**2015年6月27日（土）淑徳ゼミ　配布抜粋資料　吉田章宏**

**＃１「自己（私）を見ることが世界を見ることであり、世界を見ることが自己（私）を見ることである。」（渡邊二郎著『内面性の現象学』勁草書房、1978年、21ページ）**

**＃ ２「読み方は自己を読むものであり、綴り方は自己を書くものであり、**[聴き方は自己を聴くものであり、]　**話し方は自己を語るものである。即ち読み方・綴り方・聴き方・話し方と作業は四つに分かれてゐるが、自己といふ見地からいへば一つである。分ければ四となり、合すれば一つとなる。」蘆田惠之助（1873年1月8日 - 1951年12月9日）**（　[ 　]内は、吉田章宏が補足したものです。）

**＃ ３ 「イギリスの古い小咄でつぎのようにいわれている。『ミュラー』氏と『マイヤー』氏がお互いにしゃべるときには、いつもミュラーのミュラーとマイヤーのマイヤ－が話をするだけで、おまけにミュラーはもっぱらミュラーのマイヤーに、マイヤーはマイヤーのミュラーに話しかけるだけである。一方『本当の』ミュラーとマイヤー、ならびにかれらの会話の『すべて』の意味は、ただ全能の神のみがご存知で聞いていらっしゃると。この小咄には、残念ながら、お粗末な冗談より以上の、＜なにものか＞がある。ここには文字通りの真理が含まれている。・・・」（マックス・シェーラー著作集８『同情の本質と諸形式』白水社、1977年、130ページ）**

**＃３a「ジャックはたしかに思っている／ジルはそれを悟っている、と／しかし、ジャックは悟ってはいない／ジルは悟っていないと／ジャックが思っていると／ジルは思っている、ということを。」（R.D.レイン著、村上光彦訳『結ぼれ』みすず書房、1973年、110ページ）**

**＃ ４「教育の心理」１０６－１０９　ものの知覚における多様な射影（見え）、その総合による物（もの）の知覚の充実。近位項（見え）と遠位項（もの）の志向的構造。**

**ネッカー・キューブの話から、それぞれは、何を学ぶか？**

**近位項と遠位項、同じ近位項でも遠位項が異なる可能性。異なる近位項でも、同じ遠位項を想像し直観する統合力の可能性。同じ近位項から、多様な遠位項を想像する自由で豊かな空想力・・・。他者の多種多様な世界を豊かに想像する力、・・・、などなど。（ウタ・ハーゲン著、訳書『「役を生きる」演技レッスン』フィルムアート社、2010年、を推薦する。）**

**＃ ５ 「断章七　人は精神が豊かになればなるほど、独特な人間がいっそう多く居る事に気がつく。普通の人たちは、人々のあいだに違いのあることに気づかない。」**

**「断章九　人を有益にたしなめ、その人にまちがっていることを示してやるには、彼がその物事をどの方面から眺めているかに注意しなければならない。なぜなら、それは通常、その方面からは真なのであるか。そしてそれが真であることを彼に認めてやり、そのかわり、それがそこからは誤っている他の方面を見せてやるのだ。彼はそれで満足する。なぜなら彼は、自分がまちがっていたのではなく、ただすべての方面を見るのを怠っていたのだということを悟るからである。ところで人は、全部は見ないということについては腹を立てないが、まちがったとは思いたがらないものである。これはおそらく、人間というものは、あらゆるものを見ることなど出来ないのが自然で、また自分が眺めている方面についてならば、まちがいえないのが自然であるということに由来するのであろう。感覚の知覚というものは、常に真であるから。」**

**「断章一〇　人はふつう、自分自身で見つけた理由によるほうが、他人の精神の中で生まれた理由によるよりも、いっそうよく納得するものである。」（パスカル『パンセ』）**

**＃６ 　To see a World in a Grain of Sand**

**And a Heaven in a Wild Flower,**

 **Hold Infinity in the palm of your hand**

 **And Eternity in an hour. William Blake**

 **「一粒の砂の中に世界を見，一輪の野草の中に天国を見る。そのためには、**

 **あなたの掌（たなごころ）の中に無限を掴み，一時間の中に永遠を掴みなさい」**

 **「微塵の中に一切を見る」（華厳経）**

**＃７「ぬくもり　　野添佐渡子**

**台所のゆかのひと所に／ふんわりとしたぬくもりがあった。／母さんだ。／**

**ここに立って，茶わんを洗ったり，／つけものを切ったり，／**

**みそ汁をにたりしてたんだな。」（斜線は改行箇所。西郷竹彦著『人間観・世界観の教育』恒文社、1996年136ページ。）**　**この詩には、このお子さんの生きている世界（the lived world）が表現されています。**

**「ぬくもり」という言葉で表現されていて、「生あたたかい」と言う言葉で表現されてはいません。「ふんわり」も「ふんわか」ではありません。また，例えば，「ぬくもり」という言葉が，「熱が高い」とか，「温度の高い」といったような言葉でもありません。「ぬくもり」という言葉が選ばれているのです。ここで申し上げたいのは，一人一人の子どもにはそれぞれの子どもの「生きている世界」というものがある。その子どもの生きている世界に関心をもったとき，たった一人の子どもの世界でさえ，それを推し量るということは、一人の人間にしかすぎない私たちひとり一人にとっては，大変難しいことである、ということなのです。この，幼いお子さんが，この台所の，木の床の台所かと思うのですけれども，床にふと立ったら，足の下だけが，つまり，冷たい床のここだけが、あったかかった。木ですからある程度ぬくもりを保って，そこだけが「ふんわり」とした「ぬくもり」を感じさせたわけですね。北側の台所だったのかもしれません。その時、お母さんはそこにはいないわけです。しかしこのお子さんは，その足から伝わってくる「ぬくもり」を通して，ただちにお母さんがそこで毎日仕事をしていらっしゃることを、感じ取るわけです。おそらく朝，眠いをこすりながら起きてきたところが，お母さんが台所仕事をそこでしているその後姿を見たなどといった様々な思いがよみがえってきて，そして，足の下のぬくもりの意味が，このお子さんの世界の中でとらえられている、ということだと思います。」吉田章宏・秋田大学付属小学校講演より**

**＃８　「鏡」と「巌」：ギリシャ的な真理概念は、認識に向けられている。与えられた事実についての正しい言表である（鏡としての真理）。ヘブライ的な真理概念は、「固定した、信頼しうる、支える力のある」、「信頼できること」（巌としての真理）。「ただ真理を『言うこと』が問題となりうるだけではなくて、真理を『行うこと』が問題となりうる・・・」「神の真理は神の『誠実』にある。」（シュヴァイツァー）。「二つの真理概念が互いに分かちがたく結びついていて、交互に制約しあっていること、だから認識真理への問いも結局は道徳的な問題に帰着する・・・」「真理は人間の生の全連関の中でどのような機能」をもつか。（O.F.ボルノー著、『真理の二重の顔』理想社、1978年）ここに。　2015年6月16日記**[**http://yoshidaakihiro.jimdo.com/**](http://yoshidaakihiro.jimdo.com/)

**シュッツ**

**ドン・キホーテ、「盥兜」訳文をプリントアウトして。他者世界と出会うことによって、新たな能動的総合が、次第に、受動的総合となる、ということの一事例。**

**ユクスキュールから、『生物から見た世界』岩波文庫　K.ローレンツ『鏡の背面』**

**伊藤隆二**

**ヘレン・ケラー**

**霜山徳爾**

**荻野恒一**

**神谷美恵子『生きがいについて』**

**法華経**

**華厳経　善財童子**

**武田常夫**

**ヴァン・マネン など**

**日常生活と学問の連続性と不連続性。**

**コメント**

**西川尚武ホームページから、**

**田端健人（T）さんのコメント(「視聴覚教育」掲載)**

**ラマニシャインさん（R）のコメント（英文と和文）**